

大学生の自己教育力に関する研究 (6)

—自己教育力とセルフエフィカシー及び暗黙の知能観との関係—

○清水益治 森 敏昭 石田 潤

(大阪樟蔭女子大学) (広島大学) (神戸商科大学)

[目的] 本研究の目的は、大学生の自己教育力とセルフエフィカシー及び暗黙の知能観との関係を明らかにすることである。

一般性セルフ・エフィカシーが高い者は、失敗にとらわれることなく、何事にも積極的で、意欲的に取り組むが、低い者は、たとえ能力があっても、何事にも自信を持って臨むことができず、些細な失敗でも、その失敗経験にとらわれて不安になり、積極的・意欲的な行動がとれない(前田, 1997)。そこで、前者は自己教育力が高く、後者は自己教育力が低いと予想される。

暗黙の知能観とは、知能を固定的で変化しない特性と取るか、流動的で変化する特性と取るかという知能に対する見方である(Dweck, 1986)。知能を変化しない特性と考える者は、よい評価を得ることを目標とするが、変化する特性と考える者は、自己の能力を高めることを目標とする。そこで、後者の方が前者よりも自己教育力が高いと予想される。

[方法] 調査対象 4年制大学6校と専修学校1校の学生計768名(うち男子242名、女子526名)。

調査項目 ①自己教育力尺度 森ら(2000)の質問紙。この質問紙は、現在、中学3年生頃、小学6年生頃の3つの時代における自己教育力を課題意識、主体的思考、学習の仕方、自己評価、計画性、自主性、自己実現の7つの領域について、それぞれ5項目ずつで測定するものであり、各項目は「はい、いいえ」の2件法で答えるようになっていいる。

②セルフエフィカシー尺度 坂野・東條(1993)による一般性セルフエフィカシー尺度を用いた。この尺度は16項目について、「はい」「いいえ」の2件法で答えるようになっており、高得点の者ほど、セルフエフィカシーが高いことになる。

③暗黙の知能観尺度 Azuma & Kashiwagi(1987)が示した知能の記述リストから20項目を選び、それぞれについて、「全く生まれつきの才能ではない」(1)から「完全に生まれつきの才能だ」(6)までの6段階で評定を求めた。この得点が高い者ほど知能を固定的で変化しない特性と考えていることになる。

手続 平成11年12月に、各学校の教室で、自己教育力測定尺度の現在用、中学用、小学用、セルフエフィカシー尺度、暗黙の知能観尺度、およびその他の質問紙を閉じた冊子を配布して、記入を求めた。

[結果と考察] セルフエフィカシー尺度の得点が高い者から約±(範囲9~16、人数268名)を高群、低い者から約±(範囲0~4、人数234名)を低群とした。表1は各群の時代別

自己教育力得点の平均を示したものである。まず全体について、2(群)×3(時代)の分散分析を行った。その結果、両主効果が有意であり、高群が低群よりも、現在と中学時代が小学時代よりも得点が高かった。次に領域ごとに同じ分散分析を行った。その結果、いずれの領域でも時代の主効果が有意であり、その差は今までの報告とほぼ同じであった。課題意識、主体性、学習の方法、計画性、自主性、自己実現では群の主効果が有意であり、高群が低群よりも得点が高かった。自己評価、自主性、自己実現では交互作用が有意であった。自己評価では現在でのみ群の差が有意であり、低群が高群よりも得点が高かった。自主性では高群において小学時代と中学時代で有意差がなく、低群において小学時代が中学時代よりも得点が高かった。自己実現では低群において現在と中学時代で有意差がなく、高群において現在の方が中学時代よりも得点が高かった。

全体的に見て高群が低群よりも自己教育力得点が高かったことは、予想と一致する。自己評価に関しては現在において逆の方向であった。低群の者は、現在、よく反省していると考えられる。セルフエフィカシー低群の者は、小学時代から中学時代にかけて自主性が著しく低下し、高群の者は中学時代から現在にかけて自己実現をすることが示唆される。

暗黙の知能観尺度の得点が高い者から約±(範囲81~116、人数261名)を高群、低い者から約±(範囲20~66、人数253名)を低群とした。表2は各群の時代別自己教育力得点の平均を示したものである。まず全体の得点について、2(群)×3(時代)の分散分析を行ったところ、時代の主効果と交互作用が有意であった。交互作用について、現在は低群が高群よりも得点が高く、他の時代では有意差はなかった。次に領域ごとに同じ分散分析を行った。その結果、いずれの領域でも時代の主効果が有意であり、その方向は今までの報告とほぼ同じであった。課題意識では交互作用が有意であり、現在では低群の方が高群よりも得点が高かった。自己実現でも交互作用が有意であり、高群の者は現在と中学時代で差がなく、低群の者は現在が中学時代よりも得点が高かった。

知能を変化する特性と考える者の方が、変化しない特性と考える者よりも現在の自己教育力が高く、特にそれは課題意識で顕著に見られた。前者が特に現在、自己の能力を高めようとしていることが示唆される。さらに前者は、中学時代から現在にかけて、自己実現をすることがうかがえる。

[文献] 森ら, 2000 大学生の自己教育力に関する研究(1) 日本教育心理学会第42回総会

表1. セルフエフィカシーの高低別・時代別自己教育力得点の平均(現在-中学時代-小学時代)

群	課題意識	主体的思考	学習の仕方	自己評価	計画性	自主性	自己実現	全体
高	2.5-3.3-2.2	3.2-2.7-2.5	3.3-3.6-2.6	3.0-3.8-2.2	2.8-2.7-1.7	2.9-2.8-3.1	4.2-3.8-3.0	22.0-22.6-17.3
低	2.1-2.8-2.0	2.4-2.0-1.9	3.1-3.4-2.3	3.2-3.7-2.2	2.5-2.2-1.4	1.6-1.6-2.1	3.4-3.3-2.6	18.3-18.9-14.5
平均	2.3-3.0-2.1	2.8-2.4-2.2	3.2-3.5-2.5	3.1-3.7-2.2	2.7-2.4-1.5	2.3-2.2-2.6	3.8-3.5-2.8	20.1-20.8-15.9

表2. 暗黙の知能感の高低別・時代別自己教育力得点の平均(現在-中学時代-小学時代)

群	課題意識	主体的思考	学習の仕方	自己評価	計画性	自主性	自己実現	全体
高	2.2-3.0-2.1	2.7-2.3-2.1	3.2-3.5-2.5	3.0-3.7-2.2	2.7-2.5-1.5	2.2-2.3-2.6	3.7-3.5-2.9	19.7-20.8-15.8
低	2.5-3.0-2.1	3.0-2.5-2.2	3.3-3.5-2.5	3.2-3.7-2.1	2.7-2.4-1.6	2.5-2.3-2.7	3.8-3.5-2.7	21.0-20.9-15.8
平均	2.3-3.0-2.1	2.8-2.4-2.2	3.2-3.5-2.5	3.1-3.7-2.1	2.7-2.5-1.6	2.4-2.3-2.6	3.8-3.5-2.8	20.3-20.8-15.8